

平成31年1月24日

若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人 日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 201880242
氏名 坪内 恵美
(氏名は必ず自署すること)

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記記載の内容については相違ありません。

記

- 派遣先：都市名 マイアミ (国名 アメリカ)
- 研究課題名(和文) : がんサバイバーにおける過剰な再発不安を抱える臨床像の検討
- 派遣期間：平成 30年 7月 1日 ~ 平成 30年 12月 25日 (178日間)
- 受入機関名・部局名：マイアミ大学
- 派遣先で従事した研究内容と研究状況(1/2ページ程度を目安に記入すること)

A: がん患者の介護者の再発不安の程度ががん検診の受診率に与える影響

将来がんが再発するかもしれないという不安はがん患者だけでなく、その介護者においても負担は大きいと言われているが、介護者における再発不安の研究はまだ数少ない。再発不安の特徴の一つとして再保証の要求が知られており、再発への不安により頻回な医療機関の受診やボディチェック行動等がみられる。介護者においてがん検診の受診は一般人口よりも多いことが先行研究において示されているが、その要因等は十分に理解されておらず、再発不安が関連している可能性があると考えられる。そこで、本研究では、介護者における再発不安が、がん検診の受診率に影響を与えるかについて明らかにすることを目的とした。研究方法は、受入機関ががん患者の介護者を対象に行った全米調査のデータをもとに行った。罹患から2年以内における再発不安の程度が、その後の8年間におけるがん検診の受診傾向に影響があるかを明らかにした。現在は、解析を終了して論文執筆中である。

B: がん患者およびその家族へのメンタルケアに携わる医療者を対象とした国際調査

がん患者およびその家族に対するメンタルケアの重要性が浸透しつつあるものの、メンタルケアのニーズやその実態については国家間において違いがあるかもしれない。そこで、本研究では15か国語に翻訳した調査票を作成し、がん患者およびその家族へのメンタルケアに携わる医療者を対象にインターネット調査を実施した。調査開始から約1年が経過しているが、調査参加者数を増やすため引き続き調査を遂行している。

6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

A: がん患者の介護者の再発不安の程度ががん検診の受診率に与える影響

2月にアトランタで開催される American Psychosocial Oncology Society の学会にて口頭発表を予定している。同時に、論文を執筆中であり国際学術誌への投稿を予定している。
今後の研究計画の方向性としては、がん検診の受診率だけでなく、食生活や運動、喫煙などの健康行動をアウトカムに、再発不安がどのように影響を与えるかを明らかにしていく。同時に、がん患者とその家族の再発不安の相互作用についても明らかにしていきたい。

B: がん患者およびその家族へのメンタルケアに携わる医療者を対象とした国際調査

現在もデータ収集中であるが、途中解析を実施し、昨年10月に香港にて開催された International Psycho-Oncology Society の学会にて受入先研究者の Youngmee Kim 教授他3名の先生方が発表を行った。本学会での発表において採用者はデータ解析に携わった。目標対象者数に達成した時点で、アジアにおける国家間の比較検討を行い、国際学会および学術誌にてその結果を発表することを予定している。

7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

本プログラムにて学んだことや得られた経験は数えきれないほどあるが、今後臨床心理学の領域において研究者として成長していく上で特に重要だと思われる点について挙げた。

研究スキル 受入先研究者である Youngmee Kim 教授からはデータ解析から論文執筆までとても細かな部分にまでアドバイスをしてくれた。例えば、データ解析においては、SPSS のシンタックスを一文一文確認し、変数設定や解析のコードの書き方までご教示くださった。これまで十分に注意してこなかった点に気づくことができ、さらに難易度の高い解析方法等を新しく学ぶことができた。研究を遂行する上での新たな視点や工夫の仕方など実践的なスキルを学ぶことができたのは大変貴重な経験だった。

他にも、研究室の運用方法がとても効率的に構造化されていてとても印象的だった。大学生や高校生のボランティアも含めて全員がタスクを振られており、仕事を分担して一つの大きなプロジェクトをまわっていた。効率的にプロジェクトを進めるという意識を持つことも大切であると改めて感じた。

英語でのコミュニケーション ネイティブと同等のレベルで英語を話すことはできないが、それでも自分の意見や考えを以前に比べてはっきりと述べられるようになった。大学院生向けの授業に参加したときも、プレゼンテーションをする機会があったが、決して上手とは言えない英語であるものの、自信をもって最後まで終えることができた。また、研究で忙しくはあったが、時間に余裕のあるときは、研究室の学生の会話に交じるように心掛けた。そのような経験のなかで、正しい文法や単語にとらわれずに、もっと自然なコミュニケーションを、恥じらうことなくできるようになったと思う。

達成感による自信 派遣当初は派遣中に何をどこまでできるのか心配であったが、受入先研究者のご厚意もあり、最終的には学会や学術誌で研究を発表するまでに至ることができた。限られた時間の中で、研究に向き合い成果を出すことができた達成感はとても大きく、今後研究者として成長していく自信につながった。